



世帯数 6,178 戸
人口 13,730 人
(令和6.1.1現在)

第46回寿地区文化祭開催

令和5年11月5日、4年振りに寿体育館・福祉ひろば・敷地内駐車場を主会場として開催されました。

9時40分、オープニングセレモニーとして、寿小学校4年生有志による「ダンス・タ伊ミング」を皮切りに、駐車場敷地では屋台村、体育館でのステージ発表・作品展示、福祉ひろばでのくつろぎコーナー等、開始されました。



ことぶきサポートによる出店



各団体による作品展示

フランクフルト、焼きそばなど販売の子供たちの声が響きわたり、行列も長くなっていました。なかでも、寿さつまクラブのバームクーヘン作りのブースでは、竹竿にバームクーヘン用の生地をかけるが少しずつバームクーヘンが太くなっていくのを、興味津々で凝視するお子さんの姿が印象的でした。

作品展示は、体育館にてサークル展示と、団体活動展示がありました。その団体は、書友会、季楽句会、きつつき会、寿花の会、寿地区福祉の文化祭作品等でした。



メタボーズによる発表

ステージ発表は、午前の部の最後の部とあり、11団体の発表がありました。グラランドフィナーレは、筑摩野中学校吹奏楽部の演奏に合わせて合唱部、会場が一体となって「ふるさと」を歌いました。各種団体の発表は、久しぶりなので力も入り良く練習され、地域の皆さんに「見て聞いて」もらいたい気持ちが入った良い発表会でした。また、文化祭協賛事業も、10月28日の寿地区史跡めぐり



から、かかし祭り、マレットゴルフ大会、グラントゴルフ大会等、11月11日のかかし祭り表彰式まで、5事業が行われました。特に、4年振りに飲食を伴う形が復活し、好天にもめぐまれ、体育館入場者が1250名になるなど、大盛況のうちに終わりました。来年以降もこの形で開催を望む声がたくさんありました。また、作品展示については、作品の募集、搬入・搬出等問題は多々ありますが、もう少し町会や個人まで拡大してほしいと思います。

令和6年新年祝賀会

令和6年1月4日、夜中から続いていた雨も止み、晴れ間が見え始めた頃、「令和6年新年祝賀会」が開かれました。寿公民館正面玄関前での写真撮影も無事に行われ、晴れやかな表情を一枚に収めることができました。

今年には能登半島地震に始まり、新年早々から不穏な日々となりました。災害時は隣近所や町会内での助け合いが、生存率を高めるひとつの要因となります。本日の祝賀会は新年の訪れを祝うだけでなく、町会長を始めとする各町会役員同士のつながりを強める今年最初の行事になりました。



寿公民館は地区公民館として、今年も多くの行事を企画しています。感染症のしからみから解かれつつある今、地区内の「人とのつながり」を再び紡いでいくべきではないでしょうか。みなさまの行事への参加をお待ちしております。

【寿公民館】

わがまちグループホーム

竹瀝諏訪神社の南に「ニチイ ケアセンター松本寿」があります。施設としては、平成 6 年 8 月からありましたが、現在の経営形態になったのは平成 19 年 9 月からで、施設長(1)、事務員(1)、計画作成担当者(1)、スタッフ(14)の職員配置で運営されています。ここはグループホームと言われる施設で、認知症との診断を受け、介護認定要支援 2 以上かつ身体的には大きな問題のない方が入居しています。一定のプライバシーが確保され、スタッフの皆さんの手助けを受けながら、共同で生活しています。凶らずも、地域にこのような施設があることが、ありがたく幸運に思えた自分の一大事がありました。

昭和 6 年生まれの母は、里山辺で父と暮らしていました。父が亡くなった後は一人暮らしでしたが、何かの講座だとか、何かのボランティアだとか忙しく澁瀬と生活していました。しかしある日、警察のお世話になる騒動から認知症が明らかとなり、それ以降、怒涛の日々となりました。

認知症は、坂を転げ落ちるようにみるみる進行し、ごはんも

炊けず、料理もできず、何もわからなくなり、私を息子ではなく自分の弟だと思ってしまうようになりました。ただ、さすが昭和ひと桁生まれといふべきか体は頑丈で、特段の問題がないのが幸いでした。

包括支援センターの協力でケアマネの決定、介護認定、ヘルパーの手続き、デイサービスの申し込み等何とかなりましたが、介護生活に突入しました。わが家は妻も仕事をしているため、母を寿のわが家に引き取ることもできず、かえって環境の変化で更に病状悪化の恐れも懸念も大きいため、私が仕事帰りに里山辺の実家に寄っていました。母にご飯を食べさせ、洗濯、明日のデイサービスの準備、何もわからない母にイライラを募らせる、そんな日々でした。ケアマネやデイサービスの方からも心配され、しばらくして見かねたのか母を施設に入れる提案をされました。

ケアマネの協力のおかげで入居先も見つかり、「ニチイケアセンター松本寿」でお世話になることになりました。入居させてみてしばらくすると、母の険悪だった表情もみるみるうちに

穏やかとなり、仲の良い友人もでき、平穏でゆったりとした毎日を送れるようになりました。施設では、入居者のケアのためにも地域交流も心掛けており、通学する小中学生へのあいさつ、声掛けや、トイレを貸したり、地域のサークル団体を招いたり、コロナ禍で一時中断していた交流の復活も徐々にさ

れてきているとのこと。親を施設にお願いするというと、自分の後ろめたさもあり、何かネガティブなイメージが付きまといがちですが、『入居者にとっては、頭の中にモヤがかかったような感じで不安な中でも、本人が安心して生活できる場所であることができている』という施設長さんの言葉のおかげで、本人が安心して暮らしていることが一番であることは確かです。親自身の年金と介護保険制度の可能な範囲の活用で、本人も私の家族も救われた判断ができたと思っています。

私の経験が、何かの参考となればと思います。



【館報編集委員 上平 貴明】

史談会 視察研修

11月21日、小春日和の中、まず初めに訪れたのは史跡公園として整備された『高梨氏館跡』(土壘・空堀・建物・庭園跡)、中野市教育委員会の方の説明を聞きながら見学しました。



中野陣屋・県庁記念館

ご厚意で、続く『中野陣屋県庁記念館』についても説明していただきました。

午後には『土人形資料館』を訪れました。展示されている郷土玩具中野土人形は古くから「土びな」と呼ばれ、親しまれています。中野土人形は、奈良家の「中野人形」小形で童子のものも多く、人形の背中まで彩色されているものが特徴とのこと。西原家の「立ヶ花人形」は歌舞伎ものや歴史上の人形が多く、現在約50種類が作られ、人形の背中は彩色されています。このような二系統の土人形が昔ながらの伝統技法で現

在も同一地域で作られているのは全国を見ても類がないそうです。

最後に向かったのは中山晋平記念館です。モダンな建物正面にある、カリヨン(五線譜を形どつた鐘のアーチ)が晋平メモ

デーで時を告げていました。前庭にある「たぬき」のメロデーボックスのボタンを押すと、シャボン玉のメロデーが流れ、あわせてシャボン玉を吹き出して、のどかでホッコリしました。晋平が愛用したピアノオルガンもあり、その音色を聞くことができました。晋平は「日本のフォスター」とも呼ばれ、デビュー作は「カチューシャの唄」ですが、そのほかに童謡「てるてる坊主」など多くの傑作を残し、現代歌謡の礎を築いた先生です。



中山晋平記念館前 カリヨン

【館報編集委員 小池 妙子】